

## 連載コラム



# みずき野と その周辺の 植物と昆虫

## 第 52 回

# キリギリスとコオロギの仲間 – ツユムシ、コオロギなど –



もとよし ふさお  
本吉 総男

2019 年 9 月

日本には、童謡「虫のこえ」に歌われているように、マツムシ、スズムシ、キリギリス、クツワムシ、ウマオイなど、秋に鳴く虫の声を鑑賞する風習があります。農林水産・食品産業技術振興協会のサイトに、梅谷献二「[虫を聴く文化](#)」という興味深い記事が載っています。この記事によると、秋、鳴く虫の声を聴いて楽しむ風習は世界でも珍しく、中国と日本だけだそうです。中国では少なくとも唐の時代（8～9世紀）から宮廷の女性たちが鳴く虫を飼って声を楽しむということが行われていたそうです。

万葉集にはコオロギを詠み込んだ歌があります。ただし、その頃のコオロギは鳴く虫の総称だったようです。平安時代になると、現在いうコオロギはキリギリスのことで、キリギリスはハタオリと呼ばれるようになりました。

枕草子では「<sup>むし</sup>蟲はすずむし。ひぐらし。てふ。<sup>まつむし</sup>松蟲。きりぎりす。はたおり。われから。ひをむし。蛩。」と書かれており、きりぎりすはコオロギ、はたおりはキリギリスと解釈されています。平安時代には、虫の音を楽しむ風習が貴族の間に定着したようです。江戸時代に入って、きりぎりすは現在のキリギリス、こおろぎは現在のコオロギを指すようになったとされていますが、松尾芭蕉の頃はまだきりぎりすはコオロギを指す言葉でした。

むざんやな <sup>かぶと</sup> 甲の下の <sup>した</sup> きりぎりす 芭蕉（奥の細道）

この句は、芭蕉が加賀の小松にある多<sup>た</sup>太<sup>だ</sup>神<sup>じん</sup>社<sup>じゃ</sup>に詣でた時に、平氏に味方して木曾義仲の軍勢と戦い、討ち死にした斎藤実盛のものと称する <sup>かぶと</sup> 甲を見て詠んだ句です。山本健吉は著書『芭蕉』（新潮文庫）の中で、芭蕉は薄暗い堂内の兜のほとりにきりぎりすを見て詠んだと推定し、このきりぎりすは「ツヅリサセコオロギ」（正式な和名はツヅレサセコオロギ）のことらしいと述べています。

話は変わりますが、秋に鳴く虫として、童謡「虫のこえ」にも歌われ、まず思い浮かべる懐かしいキリギリス（チョン・ギースと鳴く）、クツワムシ（ガチャガチャ）、ウマオイ（スイッチョ）やマツムシ、スズムシは、みずき野周辺では見たことも鳴き声を聞いたこともありません。今回は、姿を見たり鳴き声を聞いたりして、みずき野周辺に棲むことが確認できたキリギリスの仲間やコオロギの仲間について述べます。なお、ここに挙げるいずれの虫も一部を除き雌は鳴きません。

なお、私自身はこれらの虫の鳴き声を録音していません。しかし、どの虫がどのように鳴くか、YouTube でかなり多く聞くことができますので、できるだけリンクしておきます。したがって、

今回は虫に鳴き声が録音された YouTube を紹介するような記事になってしまいますが、やはり鳴く虫の魅力は鳴き声ですので、それも止むを得ません。

## 1 ツユムシ、セスジツユムシ、クダマキモドキ

ツユムシとセスジツユムシはキリギリス科の昆虫ですが、キリギリスと比べると小さく、弱々しい感じですが、両種はよく似ていますが、ツユムシは後翅(下の翅)が長く突き出しているの<sup>こうし</sup>ので、セスジツユムシと区別できます。鳴き声は両種とも地味で、意識して聴かないとほとんど気がつきません。

セスジツユムシは、雌の写真を示します。残念ながら雄の写真がありません。雄は「セスジ」が褐色で、少し幅広いものが普通です。[セスジツユムシの雄の画像と鳴き声](#)が YouTube に見つかりましたので、リンクしておきます。



ツユムシ 10月中旬 第2調整池花壇



セスジツユムシ 10月下旬 わが家の庭

クダマキモドキはツユムシに近い昆虫ですが、ツユムシやセスジツユムシの頭から翅<sup>はね</sup>先までの長さが4センチ未満に対し、クダマキモドキは5センチ前後の大型の昆虫です。通常樹の上にいるので、見つける機会は少ないのですがわが家の庭に降りてきたのを写真に撮ることができました。



クダマキモドキ 10月下旬 わが家の庭

クダマキモドキとは奇妙な名ですが、一見クツワムシ(別名クダマキ)に似ていることから付けられた名です。広辞苑によると、「(1)くだまき(管巻)とは、梭<sup>ひ</sup>(織機の用具のひとつ)に入れる管に緯系<sup>よこいと</sup>を巻きつけること。(2)(鳴く



声が糸車を操る音に似ているからいう)クツムシの異称」とあります。クダマキモドキは鳴く虫の例外として、雄も雌も鳴くそうです。[クダマキモドキの雌の鳴き声](#)を YouTube で聞くことができます。

## 2 ササキリの仲間

ササキリとウスイロササキリは、草原に最も普通に棲んでいるキリギリス科の昆虫です。ササキリの写真は撮っていませんでした。ウスイロササキリの写真は載せておきます。もうひとつの写真はホシササキリの褐色型です。ホシササキリは前翅ぜんし(外側はねの翅)の側面に黒い点の列をもつササキリの仲間です。



ウスイロササキリ 9月下旬 第2調整池



ホシササキリ 9月下旬 第2調整池

[ササキリ](#)と[ウスイロササキリ](#)の鳴き声は YouTube に見つかりました。

## 3 クサキリとクビキリギス

クサキリもクビキリギスも頭から翅はねの先まで5センチ内外の大型のキリギリスの仲間で、草むらに棲んでいます。両種とも体色が緑色の型と褐色の型があります。両種は体型がよく似て



クサキリ 10月中旬 第2調整池



クビキリギス 10月中旬 第2調整池

いますが、クサキリは頭の先端が多少丸く、クビキリギスは尖っているので区別がつけます。クビキリギスは緑色の型も褐色の型も口の周辺が赤いので、血吸いバツタと呼ばれることがあります。クサキリの褐色型にも口の周辺が少し赤いものもありますが、緑色の型では赤くありません。

クサキリとクビキリギスの鳴き声はよく似ていて、「ジー」という連続音です。クサキリは9月頃鳴きますが、クビキリギスは成虫で越冬し、春の暖かい日の夜に鳴きます。春に鳴くキリギリスの仲間はクビキリギスぐらいだろうと思います。[クビキリギスの鳴き声](#)は YouTube にありました。

クビキリギスとは奇妙な名ですが、噛む力が強く、服などにかみついたとき、無理に引っ張ると首が切れてしまうことから名付けられました。

## 4 ヒメギス、ヤブキリ

ヒメギスはキリギリス科の代表種であるキリギリスを小型にしたような昆虫ですが、キリギリスは頭から翅の先まで3センチ前後なのに対し、ヒメギスは少し小さく 2.5 センチ程度です。草むらに棲んでいますが、時々路上に出てきて、シャッターチャンスを作ってくれます。[ヒメギスの鳴き声](#)を YouTube で聞くことができます。



ヒメギス 7月上旬 守谷市本町地区

ヤブキリもキリギリスに近い昆虫です。残念ながら成虫の写真を撮っていませんが、[第14回「花にくる虫たちー甲虫・チョウなど」](#)の6ページにヤブキリの幼虫の写真を載せています。したがって、みずき野周辺に生息することは確かです。しかしヤブキリは成虫になると木に登ってしまうので、見つけることが困難になります。[ヤブキリの成虫の姿と鳴き声](#)は、YouTube を参照してください。

## 5 コオロギの仲間

コオロギはコオロギ科の代表的な昆虫の総称で、エンマコオロギ、ミツカドコオロギ、ツヅレサセコオロギの3種がよく知られています。ところが残念なことに、それらの写真が撮れていませ



ん。3種とも草むらの中で鳴いているのを耳にするのですが、鳴く声を聞きつけて近寄ると鳴き止んでしまい、見つけることができません。仕方がないのでそれらの姿と鳴き声は YouTube を参照してください([エンマコオロギ](#)、[ミツカドコオロギ](#)、[ツヅレサセコオロギ](#))。

ツヅレサセコオロギの名の由来は、広辞苑によれば、「古人が鳴き声を『針(または肩)刺せ、  
系(裾)刺せ、綴れ刺せ』と聞きなしたことから名」とありました。つまりこの声を聞いた  
ら冬支度をしろということでしょう。

上3種と並んで、比較的普通にいるハラオカメコオロギは、路上に出て来ることが多いので、写真を撮ることができた。[ハラオカメコオロギの鳴き声](#)は、YouTube を参照してください。



ハラオカメコオロギ 10月中旬 みずき野7丁目

## 6 その他コオロギ科の昆虫

アオマツムシは中国から日本に入ってきた帰化種です。樹の上に棲み、甲高い声で鳴きます。みずき野にも多く、夕方から鳴き出しますが、やかましく聞こえます。写真は樹の上からわが家の門扉の支えの上に落ちてきたものです。[アオマツムシの鳴き声](#)は YouTube を参照してください。



アオマツムシ 10月上旬 わが家の入口

写真は撮っていませんが、みずき野周辺で鳴き声を聞くことができる虫が他にもいくつかいます。カンタンは人の耳に最も優しい声の持ち主で、鳴き声は「ルルルル・・・」という連続音です。鳴く虫の女王と呼ばれていますが、鳴くのはやはり雄です。昭和50年代の終わりごろ、造成中のみずき野にはまだ草むらが残っていて、夕方、つくばからの勤め帰りにカンタンの声をよく耳にしたものです。今はカンタンもみずき野周辺に少なくなったように感じています。[カンタンの鳴き声](#)は YouTube でお聞きください。

カントンは漢字では「邯鄲」と書きますが、これは完全なあて字です。邯鄲とは中国河北省にある市の名前で、虫の名は故事「邯鄲の夢」とも関係がありません。

カネタタキは家の周辺でよく見かける小さな虫で、家の中にも時々入ってきます。小さい割にははっきりした声で「チンチンチンチン・・・」と鳴きます。家にも鳴き声はよく聞こえますので、よく知られた虫と思います。[カネタタキの鳴き声](#)は YouTube で聞くことができます。

## 7 カマドウマ

カマドウマは、背が丸く、翅がなく、よく家の中に侵入し、台所、便所、風呂場など、薄暗いところに入り込みます。翅がない代わりに後脚が強く、高く跳ね上がり、人の体や周囲のものにぶつかります。

こんな不快な虫を最後に載せたのは、次の芭蕉の句を引用したかったからです。

あまやこえびかな 芭蕉(猿蓑)  
海士の屋は小海老にまじるいとど哉

これは著名な「病雁」の句とともに、琵琶湖畔の堅田で詠まれた句です。琵琶湖畔ですから、小海老は淡水の海老、漁師の家の床に置いた大きな筧のようなもの上に広げられた小海老にいとど(「いとど」はカマドウマのこと)が混じって、跳ねている様子が想像できます。カマドウマが好みそうな、小海老の生臭い匂いまで感じられる名句と思います。このように俳句になりそうもない情景を俳句にしてしまうところが芭蕉の凄さです。

カマドウマはカマドウマ科の虫で、コオロギとは縁遠い虫ですが、一見コオロギに似ているので、オカマコオロギ、ベンジョコオロギ、エビコオロギなどと呼ばれることもあるようです。自然界では洞窟など暗い場所に棲んでいます。家の周辺にも多く、台所に設置したかまどの近くによく見られ、馬のように跳ねるので、カマドウマの名がついたといわれています。



カマドウマ 12月上旬 わが家の駐車場